長久手



長久手小牧場

になってしまい、しかも夜が近づいていたのだ。なかった。最悪なことには、ひどいにわか雨が来て道が危険なぬかるみ 僕らはトウモロコシを生で食べ、焼けなかった肉をしまわなければなら

エルネスト・チェ・ゲバラ『モーターサイクル・ダイアリーズ』

棚橋加奈江・訳)

ずとした居心地の悪さに苛まれた。

花は瑞々しさを失い、悲鳴も上げずに萎れていった。 になっているのかをじっくりと見ようとした。しかし、私の指が茎に触れたとたん、 下 み固められていない、その僅かな隙間にヒメジョオンが咲いているのを見つけた。 私はそこにしゃがみ込んだ。手を伸ばして触れ、その花弁の一つ一つがどんな風 ・ばかり見て歩いていたからだ。 建物と建物のあいだ、行き交う人々の暮らしに

私とはまったく無関係に運行しているのを見ていると、私はなんともいえずむずむ ぎていくだけだ。そうした、いかにも明確な目的を内包した足取りが、 思わず喉の奥からひっと声が漏れた。すぐに辺りを見渡したけれど、私の過失に そもそも私自身にも、誰一人注意を払ってはいなかった。人々は足早に行き過 なにもない

私はただひとりうずくまってじっとしていた。 花から手を離すことはできなかっ

たが、萎れた花を支える私の指が、またいっそう花を萎れさせていた。私はだんだ ん泣き出したいような気持ちになってきた。

「あ、また。ちょっと目を離したらこれだ」 後ろからかけられた声に、顔を上げて振り向いた。 天人様がこちらを見下ろして

周りの虹色の環を明るく照らしていた。 いた。陽光が、はらはらと分かれた彼女の青い髪を腰の上で透かして、スカートの

「なにしたの、次は」

互に見た。私は彼女の視線を追った。私の手の中には、もう茶色に枯れてぐずぐず 私を外に待たせて饅頭屋から出てきた彼女は、自分の腕の中と私の指の先とを交

「触っただけなんです」と私は言った。 口調がひどく言い訳じみていた。

「良いじゃない、花の一本くらい」

に崩れた花の骸があるきりだった。

「良くないです」

いた。 天人様は私が口答えしたので目を開いて驚いたが、それ以上に私の方でも驚いて

食べなくても死なないのに口が糧を求めるのは、ただひもじくあるためだ。

はもう春の装いだったが、今日はなぜだか朝からやたらと冷えた。次第に眠くなっ 気温はいくぶん低かったけれど、その寒々しさはどちらかというと気安かった。庭 て、うつらうつらとしているところに、突然冷たい塊が額を打った。 風 は富みも痩せもしない。神社の縁側に座って私は安心してそれを浴びていた。

後ろに倒れ、目を開いて身体を起こした。季節はずれの雹だった。

らと流れていく。 い筒を吹いた。筒の口から出た玉は、透明なまだらの模様をまとって風下にふらふ は起きない。 やぼ ん玉をよくやった。 桜が散って、神社の暇なとき、 ただの石鹸水なのだから、 川がゆるゆる流れる柳の下まで出て細 幾らなんでもそう悪

始めた。 そのうちに出てきた人魚がこちらを見て、 川面を滑るしゃぼんをぱくぱくとやり

にと揺れながら動く複雑な表面を眺めていると、だんだんそれがいかにも豊かに見 最初は笑って見ていたのだが、人魚の口に入る玉の、透き通っていながら橙に紫

私は筒を真上に向けて、ゆっくり大きなしゃぼんを一つ吹いた。豊饒の球体はゆ

っくりと美味そうに膨れて、ふわりと浮き上がった。

の度に私の中での味の想像も変わった。 私は 「玉がこちらに落ちてくるのを待った。そのあいだに何度も模様が変わり、

いよいよというとき、風が吹き、玉は川の方へと流れた。私はご馳走を逃すまい 生活の味がした。 そちらに顔を大きく振り出してしゃぼんを口で捕らえた。それは口の中で弾け

前 の日に妹がどこかの金持ちから巻き上げてきた立派なダイヤの首飾りもきれいに 妹と二人で住んでいて、私の火の不始末で小屋をまるまる燃やしたことがある。

そのまま私は足を滑らせて転び、人魚の上に覆い被さるようにして川に落ちた。

灰になっていた。

ど、あまりにきれいに小屋が燃えたので、足元はさくさくと軽かった。 通り謝り倒して、 妹はみみっちいと言ってついてこなかった。煙の臭いがまだ鼻を突いたけれ 妹の機嫌が少し落ち着いた頃に、私は裸足で焼け跡に分け入

にしろ控えめの小屋だ。狭いと妹はよく文句を言っていた。私の寝床のあった場所 普段家に帰るのと変わらぬ足取りで、ここが玄関、ここが寝床、と私は思う。 るものの相手をしていた。

そのままにしていたのだ。私たちのある慎ましやかな生活の遺骨。 の辺りに熱で歪な形になった空きビンが落ちているのを見つけた。 昨日飲み干して

立てた。 たくさん灰をつけて戻ってきた私自身について言っているのかわからなかった。 「なにそれ」と妹は言った。私が持っているビンについて言っているのか、 返事の代わりに私はそのビンに口を寄せて吹いた。歪なビンはぼおうと変な音を 手足に

「馬鹿じゃないの」と女苑は言った。

り消え失せてしまうのである。 うに思うのだ。 自分が本当はこれだと思うものが、飢えの底にいるときには確かに見えていたよ 飢えは貧窮の甥であって貧窮そのものではない。だから時折私の腹は満たされる。 しかしそれも、 目の前に一斤のパンが現れたときにはきれいさっぱ

猫が好きだった。 猫の方でも私を嫌いではないようだった。 幾分星の巡 心りが

て夕飯がきちんとあるようなときには、それを少し残して、いつも近くにやってく

でたくさん毛を吐いた。それで、もう決して私は近づかなかった。 しかしあるとき、私が撫でる猫の頭の毛がどんどん薄くなるのを知った。 腕の中

泥を被り、襤褸のようにはなったが、決して私は手放さなかった。 それから少しして、妹が人形の猫をくれた。それは私と共に何度も雨に降られ、

を手に入れるべきではない。 つまりこういうことだ。手に入れたものを必ず失うのであれば、 失って困るもの

「ごっ、ごめんなさい」

ぐと饅頭を咀嚼した。甘くてとても美味しい。 慌てて詫びる私の口に、天人様は饅頭を一つ押し込んだ。私は喋るためにもぐも

ら腕組みをして考えこんでいた。しばらく互いに無言だった。 私がひとときの充足とじゃれ合っているあいだ、天人様は自分も饅頭を食べなが

天人様はどこからか桃の苗木を取り出して、私が枯らしたヒメジョオンが生えて 同時に食べ終わると天人様は私を見た。私は畏まって審判を待っていた。

いたところに埋めた。苗は瞬く間に私の腰の辺りの高さにまで伸び、青い葉を繁ら

彼女は私を見て満足げに頷いてみせた。

「ほら、これで良いでしょ。前の花は肥料になったのよ」

「ちょっとどうかと思いますけど……」

「なんでよ」

すぼめて笑った。気は軽くなったが、心はわずかに重くなった。木は露に濡れてい 今度は天人様も驚かなかった。 私の肩を軽く叩いて笑った。 私も遠慮がちに肩を

のあとに私は従った。 天人様は言う。 日は傾きつつあった。 私は頷いて通りの向こうを見た。腰に両手を当てて歩き始めた彼女 '私のそれより幾分低い位置にある彼女の肩を私は見た。 夜になれば、 広場でプリズムリバーたちが演奏するのだと

な肩だと思った。 私たちの足は目的を持って歩き始めた。

な草花の上に正 ら今もずっと伸び続けている。 膝 元で天人様が眠っている。 座している。 草花は眠る天人様の肩口から、 眠っていても賑やかな方だと思う。 もうどのくらいの時間になるだろうか。 頭の、 指の、 私は柔らか 足の下か

足を少し崩して周りを見た。草花は手を二回伸ばせば届くところで途絶えている。

その先はどこまでも白い灰。

りに積もって、この見渡す限りの白い砂漠となった。 私が一度手に入れたと思ったものはすぐにもろもろと崩れて灰になり、 灰は積も

私には到底考えられない。 それは広がりつつある。いつまでも続くことなのかはわからない。その先のことは 灰は今も増え続けているが、私の灰を肥やしにして、天人様の緑は繁っている。

を私は感じている。 夜空に星はなく、 ただ、貧しさで形作られた地平線が、遠く、しかしいつでも私を見張っているの ただ糸くずのような細い月だけが低く浮かんでいる。

触れれば、あれもまた灰になるのだろうか。

きっとなるだろう。そうであれば私は

それからまた穏やかな表情と寝息に戻った。私はその成り行きをじっと見ていた。 私が月に触れられぬままであることを祈る。 天人様を揺り起こそうかと少しだけ考える。彼女は眠りながら少し顔をしか

で味わっていようと私は決めた。 上下する彼女の小さな肩を。 それで、貧しさとは少し違う、 この明るい予感のような寂しさをもう少しひとり

発行 2018年5月6日

著者 長久手(長久手小牧場) http://na9akute.web.fc2.com/ @na9akute nagakute0komaki@gmail.com

原作 東方 Project (上海アリス幻樂団)

本書の複製、無断転載、アップロードを禁じます。